を考える

「互いに相手の立場を考えて豊かな人間関係をつくろう」――をスローガンに、今年も四日から、第三十三回人権週間が始まりました。

この間、各地で広く人権尊重を呼びかけて、さまざまな行事が行われました。

本市でも、四日、「子どもと人権」をテーマに座談会を行い、人権擁護委員をはじめ、日ごろ子どもと関わりの深い方々にお集まりいただき、意見を述べていただきました。

出　席　者

中山　仙三	人権擁護委員
大橋　正孝	〃
三木　窓外	〃
濱田加奈子	〃
笹野　貞子	〃
酒井　健三	教育委員
佐古田春雄	第6向陽小学校長
清水　重和	少年補導委員会副会長
西出　虹郎	民生児童委員協議会
清水　勝三	社会福祉協議会会長
近藤　昭三	身体障害者協会会長
杉戸千代野	乙訓連合婦人会会長
竹井　　章	京都地方法務局宇治支局長
司　　会	
中村　善保	市役所企画財政室長

（敬称略・順不同）

核家族形態のしわよせが子どもに

司会　本日はご多忙中のところお越しいただき、ありがとうございます。これから人権週間の座談会を催したいと思います。

まず最初に、中山先生から　テーマを「子どもと人権」にした理由をご説明いただき、次に、竹井支局長から子どもと人権についての歴史的な経過などをお話しいただいてから、座談会に入りたいと思います。

中山　それでは私のほうから、「子どもと人権」を考えるというテーマにした理由にふれてみたいと思います。

私たち人権擁護委員が、常日ごろ人権問題について相談をお受けしている中で近年、増加しているのが離婚の問題です。

昨年は、離婚関係の相談が12件、その前が6件、今年は上半期だけでも7件あるわけです。そのほとんどが、子どもが相当な年令に達している。

離婚されるご主人や奥さんは、それでいいかもしれませんが、いったい子どものことを、どう考えておられるのだろうか。子どもの人権をいったい何と思っているのだろうかと、痛切に感じるわけです。

こうした点について、それぞれの立場でのお話を承り、子どもの人権を見直していきたいと思います。

中山仙三氏

竹井　私たちは「人間らしく生きたい」ということを万人共通の願いとして持っているわけで、これは人権思想の基本でもあります。

しかし、この考え方を子どもの場合に当てはめてみたとき、必ずしも容易なことではありません。

子どもたちの人権を尊重するというのは、決して子どもを甘やかそうとか優遇するとかいうことではないわけです。

民主社会では、厳正なルールが守られて、はじめて真の自由が与えられるということを、子どもたちに教える責任が大人の側にあるのではなかろうかと考えるわけです。

さて、子どもの人権を考えますと、今日の家庭状況が問題になります。

旧民法当時では、大家族形態が通常でありましたが戦後、30年代から核家族形態が増加してきました。大家族形態では、その構成員が挫折したり不適応なことがあっても、他の人がそれをカバーしていましたが核家族になるとそういう周囲が包むということがなくなり、離婚とかうつ病やノイローゼになったり、そういう現象が出てきたと考えられます。

竹井　章氏

また、家族の関心が、子どもの方に移って非常にきびしいしつけをしたり、過保護に育てたりといった形であらわれ、子ども自身がその変化をもろに受けて、自閉症となったり、登校拒否や非行化、家庭内暴力とかいう形で、出てきていると思われます。

むしばまれている子どものからだ

司会　では、座談会を始めたいと思います。

笹野　今の中山先生のお話で今回のテーマが、なぜ子どもと人権なのか、ということはよくわかりました。しかし、子どもの人権という問題を話すときに、人権擁護委員のところにくる相談や離婚という問題にしぼってしまうと、これは非常に狭いわく内のことになりもっと大きな問題があるんだということに着目しなければ、この問題が誤ってしまうのではないかと思います。

たとえば、子供の人権を云々するとき、デモクラシー国家の中において、だれが子どもを保護するのか、という最も大きな問題を追求しなければならないのではないか。経済優先政策をとったり、学歴偏重社会であったり、男の出世主義であったり、自然開発をしたり、そんなもっと大きなところに、子どもの人権が侵害されている部分があるのではないかと考えるわけです。

笹野貞子氏

佐古田　私は、学校で大事なお子さんをお預かりしながら三十数年教壇に立って、三十年前と今日の子どもを見まして、ずいぶん変わってきたと思います。学力や勉強のこと、いわゆる知識主義については、非常に進んだけれども、人間を人間として大事にすること、働くことを大事にすることが教えられていません。

また、今の子どもたちは体が非常にむしばまれています。もう、骨はしょっちゅう折っています。それから、ボタンと倒れても、今の子は、手をつくと手が折れます。顔からついていきます。むし歯は圧倒的に多く近視も多数です。

佐古田春雄氏

精神的な面でも、弱い面がたくさん出てきまして、たとえば、非常に根気が欠けた子どもが増えてきました。人に対する思いやり、親切、助け合うということが、どこかにいってしまったような感じがして、さびしくてなりません。

そして話されることは、今の子どもたちは悪い、あるいは悪くなったと言われる。しかし、悪くしたのはやっぱり私たち大人なんじゃないか。子どもが一人の人間として、人格者としてほんとに育てられているんだろうかというあたり、もう一度考えてみなければならないと思っています。

司会　障害者のお立場からは、どうでしょう。

近藤　日ごろ仲間と話したり、私自身も感じているんですがそれは、障害児といえども普通の子どもと何ら変わりがないということです。すべての人権を尊重するということは、一つのリハビリ治療ということで意義があるんですが、リハビリをはなれれば健常児といっしょに教育を施すというかたちが理想だと思います。子どもの立場からすれば、やはり、みんなと机をならべたいという気持になるのは当然でしょうからね。

また、障害児にならないような対策も必要です。たとえば、小児マヒとか精薄とか、そういった判断が生まれて3か月以内にできたら、これは治ゆすることができるんだという話を聞いています。その間に発見する医療的な研究ができていかなくてはならないと感じます。

近藤昭三氏

異常な事件はおとな社会の象徴

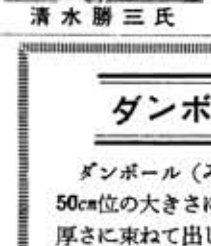
酒井　今までのお話をうかがいまして、もっともだなと思っておったんですけれど、ただ、マスコミなどで特殊なケース、異常なケースがクローズアップされて全体が非常にネガティブな、あるいは悲観的に見えて、子どもたちのさまざまな問題がもろにでてきている部分だ」と分析していたと思う。

濱田加奈子氏

司会　大人の姿勢が大切だということですが、日ごろから民生児童委員として、家庭の中に入っておられる西出さん、どうでしょう。

西出　最近、母子世帯の相談が私のところでは多くなっています。その原因というのは、サラ金で主人が蒸発ということで保育所入所の件、これが圧倒的に多いです。

母親は、やはり収入の多ラーメンで食事をしている。そういう家庭があるので、なんとかしてあげたいんですけど……。そういう家庭が多くなっているのが現状です。



清水勝三氏

ダンボールは必ずこわして

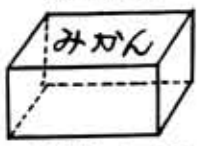
ダンボール（みかん箱など）は、必ずこわして30cm～50cm位の大きさに切り、ポリ袋に入れるか、5cm程度の厚さに束ねて出してください。

なお、ダンボールを束ねてなく、大きい場合は収集しないことがありますのでご注意ください。

良い出し方

（収集します）

悪い出し方



（収集しません）

◆消防へのお問い合わせ・ご相談は◆

☎九三四―〇一一九番

年末火災予防運動

12月25日～31日

▷お出かけ前、おやすみ前には、必ず防火の点検をしましょう。

▷たき火時の消火準備とあと始末を徹底しましょう。

▷故障している暖房器具は使わないように。

▷灯油はポリ容器（20ℓ）2缶程度とし、買い置きをしない。

▷老人、からだの不自由な人だけを残して外出しない。

共同募金にご協力ありがとうございました

さる10月1日から展開されていました共同募金運動は市民の皆さんの多大なご協力によりまして目標額を上回る成果をあげることができました。

この善意の募金は、京都府共同募金会で集約・再配分され、向日市内の福祉施設などに還元されます。募金の使途については、趣旨を十分に生かして、福祉のために有効に活用していきます。

市民のみなさんの善意に深く感謝し、ご報告申し上げます。

▶目標額　3,524,000円

▶募金額　3,731,912円